

# 福祉における人間と生活の考察

安藤順一

Studies on Human Beings and their Life in Welfare

Junichi ANDÔ

## はじめに

すべての学問や思想の根底には、ひとつの人間観がひそんでいる。特に学問を哲学的に追求しようとするとき、そこには人間についての考えが明らかになっていなければならない。とりわけ人間の救済を目的とし、救済のための諸政策を立案し、実施していく福祉にとって、人間をどのようにとらえるかは政策の内容を決定する重要な要因となる。このことは社会福祉の発展の歴史からみても明らかである。たとえば、社会福祉は慈惠・慈善事業として出発し社会事業へ、ついで社会福祉事業として発展してきたが、その根底には人間観の変遷がある。すなわち貧困救済という立場からみれば、最初貧困な人間はあわれみの対象として存在し、資本主義の進展とともに国家・社会のために存在する人間観となり、救貧対策もこの人間観の立場からなされた。しかし、戦後は健康で文化的な生活が損なわれない権利をもつ存在としての人間観にかわり、この観点から貧困に陥らないように、都市計画、住宅計画、教育計画、医療計画などが立てられる。つまり、貧困は国の責任において国民全体で排除していくべきものであり、そのための諸計画、諸施策は、ばらばらではなく統合され、しかも積極的に推進されることになった。

このように福祉は人間観の変化とともに発展する。このことは人間を問うことによって福祉が進歩し、また人間は社会の中で生活して生きているから、社会の中での生活を問うことによって福祉の内容が変化することを示している。

以上のような観点から、この小論では現代の人間の生活を問い合わせながら福祉の根源を考察しようとした。

## 人間への問いと人間の本質

人間とは何かという問いは、すでに古代から發せられ、これまでこの問いに対して人間はさまざまに定義されてきた。いま、その若干をあげれば次のようである。

- ・現性的人間 (*homo sapience*), ・工作的人間 (*homo faber*), ・自然人(*homo naturalis* ),
- ・宗教的人間 (*homo religios*), ・教育的人間 (*homo educandus*), ・旅する人 (*homo viatur*), ・流動的人間 (*homo movens*), ・経済的人間 (*homo economics*)

ところで、人間が人間を問うとき、そこには4つの特色が考えられる。それは①人間を問う者自体が人間であり、自分が存在していることを知っていること、②人間は世界の中にあり、世界に包まれて存在するがゆえに、世界から影響をうけ、世界を離れては人間を問うことができないこと、③人間を問うことは、人間と世界を明らかにすることであり、それによりさらに、計画を立てて人間と世界を変化させようという意図があること、④その意図は活動により具体

的に実現されることである。この4つの性格を端的にあらわせば、①を実存性、②を世界性、③を未来性、④を活動性、ということができる。

実存性とは、自己が「ひと」一般として生きているのではなく、時間的空間的に限定された「ここ」に現実に存在していることを知ることであり、世界性とは、人間が世界の中に在る存在として、世界とかかわりあって存在していることである、一般に自己の生活とかかわる世界を生活世界というが、人間はこの生活世界の中で世界から影響をうけながら生きている。

人間は生活世界の影響をうけるが、一方、単に生活世界と受動的にかかわるのみの存在ではなく、新しい世界を形成する力をもっている。つまりこのことは、人間は自己の未来像にしたがって自己の存在の在り方を決定することができ、また自らの自覚をもって世界を変化させることができることであるといふことである、これをここでは未来性といった。そして、世界を変化させる力は「主体的能動性」である、主体的能動性とは、自己の未来像にしたがって、「かくありたい」、「かくあらねばならない」という願望と確信によって動かされる力である、ここでいう主体的とは「人間が独自で自覺的な存在である」ということであり、また、能動性とは、「人間のいのちの力」ということである。

人間はこの主体的能動性により活動力が与えられ、新しい自己と世界を形成しようとする。ハンナ・アレントが、「人間は活動と言語によって自分が誰れであるかを示し、そのユニークなアイデンティティを積極的に明らかにし、人間世界にその姿を現わす」というのもこのことを示していると思う。

このように人間を問うとき、問う者が、①自己の存在に対してどのような願望や確信をもっているか、②どんな世界に生きて人間を問おうとしているか、③どのような世界をつくろうとしているのか、④これらのことについてどのような活動をしようとしているか、によって人間の定義は変わってくる。たとえば、さきの流動的人間という定義は、現代社会の特徴の1つであるモビリティ（移動可能性）に視点をおいた立場からの定義である。すなわち、それは現代社会が流通経済社会であり、動かないものは価値がないという動態的状況に着目し、存在の目的と行為の最高価値をモビリティに求めようとする立場の人間定義なのである。

ところで人間の本質とは何か、これについては次のように考える。すなわち、人間の本質は受動的かつ静的な存在ではなく、主体的能動性をもって自覺的に自らが世界とかかわりあって生き、それによって存在の意味を見出し、新しい世界を形成していくところにある。ここで特に、自覺的に生きるということを強調したい。なぜなら、人間は単に生きているだけでは真の人生とはいえないのあって、真の人生は自覺的に生きるところにあるからである。

この考えは、じつにシュワイツァー博士の考え方によっている。周知のように、博士はアフリカの一角ランバレネにあって黙々と黒人のために50年余の歳月を捧げた人である。博士は人間の意識の真相は<生きんとする意志>にあるとされる。生きんとする意志は、単に生きながえるということではなくて、生命を肯定し、生命を神秘的なもの、価値あるものとして感ずる意志である。そして、生きんとする意志が哲学的に表現されるとき、それは<生命への畏敬>となる。生命への畏敬は世界と人生とを肯定することである。そしてこれはまた、個人と人類の倫理的基礎となるべきものである。なぜなら、人間は生きとし生けるものすべてに責任を感じ、苦しんでいる生命に対し助けようと献身するとき、倫理が生まれるからである。博士の主張には深い生命の肯定と人間の生き方が示されていて参考になることが多い。

## 福祉における人間への問い

われわれは、さきに人間とは何かを問うことから出発したが、この問いは福祉を問うことにも通ずるものである。なぜなら人間への問いは、よりよき生き方を追求するためのものでありよりよき生き方の追求は、じつは福祉がめざすところのものだからである。

周知のように、福祉は welfare であり、これにはよき旅路をたどるための生き方を希い願う意味が含まれている。このところから福祉もまた人間を問うものであり、生き方を問うものである。福祉における人間への問いは、人間らしい生活とは何か、というより具体的な相の問い合わせより始められる。それは、人間らしい生活を確保するため、どのように貧困から脱出するか、という問い合わせである。そして人間とは、世界とかかわりあって生き、実存する人間が、そのかかわりのなかで新しい未来像をえがき、その実現に向って働きかけていくものであると規定した。すなわち人間を定義することは、実存する人間が世界と未来と活動という 3 分野のかかわりの中で、どのような確信を人間に對してもっているかを披瀝することである。ここでいう実存する人間とは、単なる受動的かつ静的な存在ではなく、自覚をもって生き、それによって存在の意味を見出し、新しい世界を構築していく人間のことである。さらにまた、新しい世界を構築していくことのできる根源的な力は<主体的能動性>であると規定した。この主体的能動性をここではくいのち>と呼びたい。主体的能動性がいきいきと働くことは、いきいきとしたくいのち>をもつことであり、これが生きがいにつながっていく。生きがいとは、生きていてよかったという思いと未来もよりよく生きようという思いが含まれる。すなわち生きがい感とは現在と未来に対する内的充実感である。

ところで、世界・未来・活動の 3 つの領域とかかわり合う人間を福祉の立場から考えれば、次の 3 つの主体的存在者としての人間が考えられる。

### (1) 生活主体としての人間

これは世界とかかわりあう人間というとき考えられるもので、この場合の世界が、人間の生活とかかわりのある生活世界であることはすでにふれた。すなわち、人間はまず生活主体として存在するものであり、福祉はこの生活主体としての人間の生活を保障するものでなければならない。生活主体としての人間生活の保障とは、現在の生活を豊かにするための援助をするだけのものではなく、将来の不安をも排除する保障が確立していくことである。

われわれの生活には、さまざまな将来への不安が満ちている。たとえば、それは疾病、事故、災害などのような不測の事態や肉体的な衰えや老齢などの予測不能な事態に対する不安である。これらの不安に対し福祉の立場からいえば、国家的立場からなされる経済的保障、さらに個人的立場からなされる保険制度の確立が必要である。この確立があって、人間はゆとりをもって生活することができる。つまり福祉は生活に追われ、社会に追われて無我夢中で生きてではなく、ゆとりをもって生活設計ができ生活主体者として生きられるようにすることである。この主張は、じつはガルブレイスの著『ゆたかな社会』にみられる主張によっている。彼によれば、高度の経済的保障は最大の生産のために必要不可欠のものであるという。これは高度の経済的保障によって生活のゆとりと、同時にこころのやすらぎがもたらされ、これが生産に反映されるからである。このような意味で、福祉はまず生活のゆとりとこころのやすらぎをもたらすものでなければならない。

### (2) 目的主体としての人間

これは未来とかかわりあう人間という立場から考えられるものである。すなわち福祉の立場

からいって、未来の新しい世界を構築するということは、人間全体が未来においてより深いく生活のゆとりとこころのやすらぎのなかで生活ができる世界を築きあげていくことである。そしてこのゆとりとやすらぎの生活をするのは個々の人間（個体）であり、人間全体（人類）である。目的主体としての人間という表現も福祉が目的とする幸福な生活、つまりゆとりとやすらぎの生活を享受する主体が人間であるという意味で使っている。

ところで、さきに主体的能動性をいのちといったが、このゆとりとやすらぎの生活、つまり福祉をいのちの立場からいえば、福祉はいのちのやすらぎを共有する世界だと思う。いのちのやすらぎを共有することとは『愛すること』である。そしてこの愛の世界は個体は全体のためにつくし、全体は個体のためにつくす世界である。このことはどういうことであろうか。これは個体としての人間一人ひとりが社会的役割を果すこと、さらに生きていく過程において、自己の責任でない原因はいうまでもなく、自己の責任における原因であっても、個人が悩み苦しむとき、全体が責任をもって愛と救済の手をさしのべることである。たとえば、先天的な障害をもった児童も、不注意による事故の後遺症に悩む者にも、すべての人びとが人間として共感し、苦しむ者のいのちを健やかにするために援助することである。この援助は、いうまでもなく国家・社会が責任をもって行わなければならない。しかし社会を形成するものは個々の人びとである。それゆえ一人ひとりが優越者または弱者としてではなく、お互いに共通地平において現在を生きる人間としていのちの苦しみを感じ合わねばならない。これが可能なとき愛を具現した世界は実現されると思う。

このように福祉の目的は、いのちの苦しみを感じ合い、いのちのやすらぎを共有する世界をつくっていくことである。

### (3) 実践主体としての人間

人間の本質のひとつは活動することである。活動とは、主体的能動性が外部にあらわれるこことであり、いのちをあらわにすることである。具体的には、それははたらくこと、学ぶこと、事物と世界の意味を知ること、他者と交わること、他者と交わることにより自己を知り、生き方を知ることである。

ところで福祉の立場からいえば、活動は身をもって愛を実現していくことである。いのちが苦しんでいたら、黙って苦しみを感じ合い、いのちがやすらぐまで献身することである。これは福祉実践であり、この福祉実践をしていくのは人間自体である。この意味で人間は、まさに実践主体なのである。

ドイツの作家シラーは、その作品『カシアス書簡』の中で人間の生き方には4つのものがあるという。①は困窮している者にはあわれんで物を恵みさえすればよいと思う生き方で、これを「あわれみ的人生」という。②は自己の行為に対してつねに報酬を求める生き方で、これを「功利的人生」という。③はすべての行為を道徳的基準に照らして考え、義務として行っていくとする生き方で、これを「義務的人生」という。④はあわれみでもなく、名声や利益のためだけでもなく、また他律的な義務感による行為でもなく、まさしく理くつぬきの、人間としてやむにやまれない心情による行為に基づいた生き方で、これを「美的人生」という。そしてシラーは、この美的人生こそ人間にとて最高の生き方であるという。

内村鑑三もまた、その著『後世への最大の遺物』のなかで、人間には4つの生き方があるという。①は金銭を貯めて、ひとのために使うこと、②は物をつくり、ひとの役に立つこと、③は書物を書き、思想を残すこと、④はこの世を歓喜の世と思い、精一ぱい生きること、である。内村鑑三はこのうち第4の生き方を最高の生き方とする。

このように人間にとて最高の生き方は、人間の本性に基づく生き方である。そこでは欲望を満足させたり、名声を得ようという思いもない。これはまさにいのちの自覚による生き方である。伊藤隆二は次のようにいっている。「この不如意で無意味な人生をそのまま引き受けて飄ひょうと生きる。隣人が困っていたら、だまって手をさしのべる。その行為はとくに裏められるものでなければ、自慢すべきものでもない。自然であって、これが真のすべてである。このような人の集りを福祉社会と人はいう。わざわざ福祉などという語を冠する必要もない」と。ここには福祉社会に生きる実践の相が端的にあらわされている。

ところで、実践主体としての人間が実践へかりたてられるものはなにか。それはくいのちへの感動だと思う。いのちへの感動とは、すべてのものにいのちがあり、すべてのものがいのちの欲求をもって生きていることを知るときの感動である。糸賀一雄はこれを「生命の欲求への共感」ということばであらわしている。

重度の障害をもつ15歳の男の子。保母さんが毎日おしめをかえるのだが、ある日その子が一生懸命に力んでいる姿に気づく。はっと思ってみると、それは寝つきりの子が、おしりを持ち上げ、おしめを入れやすいように一生懸命努力しているのであった。この生きている精一ぱいの姿に保母さんは感動し、この感動が2人の関係を深めていく。これは糸賀にみられる事例であるが、このような姿は、障害児に接する者にはしばしば経験されることである。スプーンが持てなかつた子がスプーンを持とうと懸命に努力している姿、立つことのできない子が懸命に立とうと試みている姿に接するとき、いのちへの深い感動におそわれる。福祉実践へ駆りたてられる原動力は、このいのちへの感動である。そしてこの感動は、生けるものすべてに及び、自然への畏敬にまでひろがっていく。

このような意味で、福祉とはいのちへの感動をもって生きることであり、いのちにみずみずしさを与えるものである。

以上のように、生活主体、目的自体、実践主体としての人間を考察し、総合的に福祉を考えるならば、福祉は生活のゆとりとこころのやすらぎを与えるもの、また感動をもって生きられるようにするものであり、これはまた幸福というものの内容でもある。

## 現代の生活と福祉における生きがい

### (1) 現代の生活と生活態度の特徴

生活とは何か。生活とはくらしのことであり、くらしとは「<sup>すがた</sup>生きていく相」である。このことは個人が感じたり、理解したもの、さらに「かく生きたい」とか「かくありたい」と意欲するものを表現したり、実践したりすることである。

しかしながら、われわれ人間はこれらのものを全く自由に表現したり、実践したりできるわけではない。なぜなら人間は社会的存在であり、相互に影響しあう対人的行為をとおして生きているからである。たとえば、一人の人間の表現や実践は他者に影響を与え、また他者の表現や実践から個体は影響をうけるからである。そこで相互に与えるマイナスの影響を避けるため、人間は相互に共通な行動様式、または生活様式をつくりあげる。この様式を総称して文化といふことができるが、生活とはこの文化のなかにおけるくらしのことである。したがって生活は一面では文化への適応という型をとり、他面では生物体としての自己をやしない自己の個性を発揮しようとする型をとる。すなわち、前者は「文化適応」であり、後者は「自己実現」である。人間は生きる場の文化に適応しながら、個性的な生き方を求め、自己実現を目指して生きている。これが人間にとての生活の本質である。

ところで、総理府の発表（「国民生活に関する世論調査」昭和56年）によれば、国民の約90%が自らの生活程度を中流とし、「趣味にあった生活」、「のんきな生活」を志向している者が多いという。このことから、現代の人びとの多くは、現状に満足し、物質的欲望の充足やレジャーへの志向を中心とする生活を送っていること、また自己中心で私生活優先的な生活態度があることがうかがえる。』

これらの生活態度からは、人と人との心のつながりを求め、さまざまな生活問題を解決していくこうとする新しいエネルギーも生まれてこない。生活問題とは、生活にかかわるすべての問題をさすが、福田義也は最近の生活問題として次のものをあげている。<sup>5)</sup>それは①社会的消費財の不足と劣悪さによる政治問題（ゴミ処理場など衛生関係施設問題、保育所などの福祉施設の不足、土地・住宅などの社会消費財の不足の問題）、②自然の収奪による生活問題（空気、日光、水、樹木、大地などの汚染の問題）、③個人的消費財の劣悪さや過剰による生活問題（有毒食品、有毒薬品や人体に悪影響を及ぼす日用品の濫乱の問題）、④人間性の頽廃、連帶の喪失による生活問題（近隣関係の喪失、孤独化、生きがいの喪失とアルコール・薬物への耽溺などの問題）、である。

人が私生活のみに埋没し、他人や社会に冷淡で、広い立場から生活問題を考えようといとき、そこには福祉の危機が訪れる。

ところで、現代の人びとの生活には次のような共通した生活態度が観取される。これには、①日常生活の電化による労働回避の生活態度、②耐久消費財の画一的普及による物質中心主義の生活態度、③管理社会・情報過多社会における受動的生活態度、④性差の減少と享楽的な社会風潮における自己中心的な生活態度、⑤科学技術を優先することによって生ずる自然を忘れる生活態度、の5つのものが考えられる。

次にこれら一つひとつ的生活態度にみられるマイナス面とそれが福祉に与える影響を述べたい。

## (2) 現代の生活態度にひそむ福祉的不幸の原因

①現代の家庭生活用品は、洗濯機、カミソリ、歯ブラシから料理まですべて電化されている。このため生活は便利になり、母親はさまざまな手仕事から解放される。このことは利点であるが、一方そこには母と子の手づくりの人間関係の喪失がみられる。

母親が井戸から水を汲み、腰をかがめ子供の下着を洗う。そしてゆすぎ太陽の下で干す。この仕事の中には労働の厳しさとともに子どもの成長のにおいを嗅ぎ、汚れの度合いにより子どもの性癖を知ることから、そこに親子の情愛を感じることができた。しかし電気洗濯機ではそのこともなくなっていく。なぜなら、そこでは手づくりの人間関係が失われるからである。手づくりの人間関係とは、自らの労力をとおしてつくりあげたもの、得たものを相手に与えることである。または、買いかえて不用になったテレビを施設に贈ることではなく、自分には必要なものであるが、それでもなお他者のためにゆずることである。ところで、人が便利さを求め、便利さに慣れてしまうとき、そして労働を回避しようとするとき、肉体的労働を伴う福祉的実践への参加を阻んでしまう。

②冷蔵庫、冷暖房器具、カラーテレビなど、耐久消費財の画一的普及は中流意識を生み、物質的に豊かさのみを求める心情を生むが、その心情は精神的な豊かさよりも、まず財貨購入に力を向ける。このため、表面的には繁栄しているようにみえるが実は家計のやりくりやローンなどによって保たれている見せかけの繁栄にすぎない。したがって、不況の煽りや長期療養を必要とする病人がでた場合には、経済困窮に陥り失業という事態も起りうる。そして、ときに

は家族離散、一家心中などに追いこまれることもある。

このように物質中心の生活は、要求する物質が満たされたときは満足するが、また次の欲求が起ころって満足することが少ない。それゆえ、物質のみを追い求める生活は決して幸福とはいえないし、福祉の立場からいえば物さえ与えればよいとする態度につながる危険性をはらんでいる。

③現代は社会が巨大化し、生活も複雑になり、管理体制も強化されてきている。管理体制が人間に与える影響は、非人間化と人間の部品化である。人間は自己の個性を押えて、その管理体制下に入らざるをえない。また現代は情報化時代であり、商品やレジャーに関する情報がさまざまなメディアを通して一方的にくり返えし流される。このため、人間は受動的になり、実践主体としての人間の自覚を忘れていく。そして、このような傾向が市民参加の福祉運動の推進力を弱め、福祉の進展を妨げる。

④婦人労働者の増加と男性に劣らない婦人の活動は性差を少なくし、これまでの男性の仕事、女性の仕事という固着した考えにとらわれない自由性が社会に生じてきた。そして戦後にみられる既成の価値、規範に対し、納得のいく普遍的な根拠がなければ尊重する必要がないという風潮は、社会の豊かさともあいまって、男女関係についても寛大で、また享楽主義的な傾向を強めてきた。このため自己中心的な生活態度が支配的となる。この態度は相互の生活不干渉をモットーとし、狭い視野からものをみるために、社会的立場から考えようとしない偏狭さがある。隣家の騒音に立腹し、訴訟問題にまで発展するのも、この生活態度のあらわれである。そしてこの生活態度は、福祉とは全く逆の態度である。なぜなら、福祉は奉仕と協働の精神が根底にあるからである。

⑤現代の人びとは科学技術の万能を信じ、功利性を求める傾向が強い。この傾向は自然を忘れ、自然を見失っていく生活態度をつくっていく。じじつ、科学技術の進歩は生活を便利にする利点もあるが、それは自然を破壊してなりたつ場合が多い。その結果、大気汚染、空気汚染などの環境汚染に悩まされながら生きなければならない。それなのに人間は機械によって変貌していく自然を知恵の勝利とみ、人間のこころの自然まで失っていく。ここに人間の悲劇がある。人間はもともと愛の連帯感情のうちに手をつなぎ合って生きるのが自然なのである。伊藤隆二は「愛とは人間の自然の情として、師や目上を敬い、弱いものをいたわり、真理を尊ぶ感情である」といわれるが、現代人はこの自然の感情を失っていく。人間は本来自然の一部であり、自然としての人間が自然の一部であるような環境こそ望ましいのである。

ガブリエル・マルセルは、その著『人間それ自らに背くもの』のなかで、現代の人間は破滅の可能性に直面しているという。そして人間の破滅をもたらすものは技術である。しかしながら、技術そのものに罪があるわけではない。技術は人間の理性の能力を具現したものであるから、それ自体はよいものである。しかし、その技術の進歩のなかに自然への畏敬の念や人間愛の精神が忘れられ、自然を考えることもなく、技術万能を信じていくところに人間の破滅があるのである。

ところで、科学技術における立場は、自分にとって利用できるもののみが価値あるものであるとする立場である。この立場は人間関係においても技術をもってみる眼で眺めてしまう。それは他人をものとしてみようとする眼であり、自己を犠牲にしても他人に役立とうという思いを殺す眼である。それゆえこの生活態度は、自他の感情に基づく福祉の人間関係を歪めてしまう。

以上のように現代生活の底流にみられる生活態度は必ずしも、福祉の発展を促すものではない。なぜなら福祉は、①物質的欲望の充足によって与えられる満足感のなかではなく、ある程

度の飢餓感のなかで自らの力をもってそれをのり超えようとするところにある。②受動的で自己中心的な享楽的な生活のなかにではなく、他者のために身を呈して行う実践活動のなかにある。そして、③その活動は個人の利益や名声のためではなく、人間の自然的な感情が自然的な場であらわれるというところに存在するからである。

それでは、現代の生活態度が福祉に貢献しうるために、なにが必要なのであろうか。それは<福祉のこころ>である。

### (3) 福祉における生きがいと人間復興としての福祉

さきに人間とは何かを問い合わせながら福祉の本質を考え、福祉とは、生活のゆとりとこころのやすらぎ、そしていのちへの感動をもって生きられることであると規定した。また、人間生活の立場から考えるとき、福祉とは、個人レベルでは物質的満足がすべてではなく、ある程度の飢餓感があっても、感謝のこころをもって生きること、対他者レベルでは、他人を思いやり献身的な活動をすることであると規定した。そしてこれらを総称して<福祉のこころ>と呼ぼうと思う。つまり福祉のこころとは、病気の子にも、心身に障害のある子にも役立つことをする根源的なものであり、そのことによって自己をも他人をも幸福にするものである。そしてこれはまた、すべての人とともに人間であろうとするこころであり、その営みが社会福祉実践である。

ところで、福祉のこころをもって実践するとき、そこに生きがい感がうまれる。生きがい感とは、自己のいのちの充実感を覚えている状態であるが、このいのちに充実感を与えるものは3つある。それは①生活、②健康、③愛である。生活とは生活条件が改善され、生活資源が充足していること、つまり極度の貧困に追われないことである。健康とは、疾病がなく、かつ精神的に健康で、社会的にも幸福であることである。愛とは、<いのちをいとしむこと>である。愛されているということは、自分のいのちがいとしまれていることであり、愛するとは、他のもののいのちをいとしむことである。

このように、生きがいには3つのものが必要であるが、福祉における生きがいとは、これらの3つのものを他者と分ち合うことによって生ずるものである。たとえば、困窮した生活に悩む者、病いに苦しむ者、孤独のなかにあって苦悩する者、これらの人びとと共に、その困窮さを、身体の痛みを、また孤独の寂しさを分ち合うことである。すなわち、福祉における生きがいには、他者に対して、自らをひらき、自らを与えることにより、よろこびを感じることなのである。このことは、重病のため幾たびも死を考えたという患者と医師や看護婦さんの関係にもみられる。すなわち、医師等の献身的な看護により、病気になる以前にもまして充実した日々が送れるようになるのは、この自らをひらき、自らを与える相互関係により、相手に生きがい感を生ぜしめたからである。そして自らもまた、それにより生きがいを得るのである。

それでは、相互に生きがいを与える関係はどのようにしてつくられるであろうか。それは、われわれが同じ人間であるという共通の意識と人間に対する共通の愛情である。そして自分は今は病んではないが、いつかは病む者となる可能性があるということ、また、現代は一人ひとりが勝手なことをしていくには生きられない社会であり、世界であるということによる。これらの理由が人間をして他者と愛をもって交わらしめるのである。愛をもって他者と交わることができるとき、生きがいのある未来がひらかれる。そしてこれはまた、現代社会生活の病理によって苦しんでいる人間の新しい再生である。この意味で、福祉は人間復興なのである。

## おわりに

福祉は、日向におかれたり、日陰におかれたりする。つまり選挙戦のときはことさらに強調

され、それが終れば影をひそめてしまう。丁度心身障害児・者問題が国際障害者年のは声高に論ぜられ、それが終れば声が低くなってしまうように。しかしながら、福祉は人間の生存の根源の問題であり、利用したり、利用されたりするようなものではない。福祉は謙虚に人間を問う所に存在し、人間存在を問うところに人間のありようや、福祉実践の方向が示唆される。たとえば、福祉の今後の課題といわれるノーマライゼーション（障害者、高齢者を社会から分断、隔離することなく共に暮らし、共に生きぬくような社会をつくっていくこと）や、インテグレーション（福祉、医療、教育、住宅などの保障がその人その人にふさわしい形で統合され、具体化していくこと）、さらに、パーティシペーション（ボランティア活動などによる市民の福祉参加）なども、この人間のありようを問うところから生まれてくる。そして、このような福祉課題を解決していくための実践活動を可能ならしめるものがくいのちへの感動である。いのちへの感動はまた他者の存在への共感となり、これが<福祉のこころ>となる。現代の福祉に最も欠けているのは、この福祉のこころであり、高齢化の深まつていく社会において、それは特に必要なものである。

#### 参考文献

- 1) ハンナ・アレント、志水速雄訳：人間の条件、205、中央公論社、(1979)
- 2) 黒川紀章：ホモ・モーベンス、14、中央公論社、(1973)
- 3) 伊藤隆二：社会福祉の焦点、47、柏樹社、(1979)
- 4) 糸賀一雄：愛と共感の教育、152、柏樹社、(1974)
- 5) 福田義也：社会福祉の社会学、33～37、一粒社、(1981)
- 6) 伊藤隆二：人間であること、34、柏樹社、(1980)
- 7) 庭田範秋：社会保障と個人保障、慶應通信、(1981)
- 8) 松原治郎、山本英治：人間生活の社会学、垣内出版、(1982)
- 9) 園田恭一、田辺信一：生活原論、ドメス出版、(1979)
- 10) 那須宗一：現代病理の社会学、学文社、(1983)